

# ジャンケレヴィッチにおける基底の問題

田 中 優 一

## はじめに

本研究の目的は、ウラジミール・ジャンケレヴィッチ (1903-85) が、『後期シエリング哲学における意識のオデュッセイア』(1931)において、シエリング・F. W. J. (1775-1854)の基底概念を瞬間の概念として定義し直したことを明らかにすることである<sup>(1)</sup>。

## 第一節 ジャンケレヴィッチにおけるシエリングの基底

第一節では、ジャンケレヴィッチが、シエリングの基底概念に着目することでシエリングの哲学を生成の哲学、すなわち、基底が可能なものと事実的なものあいだで往来運動することの哲学として捉えたことを述べたい<sup>(2)</sup>。なお、ジャンケレヴィッチのシエリング解釈において基底は、過去である。なぜなら、われわれは現にあるので、現在をその現在に先立つ基底とすることはできないからである。また、自分が現在を基底にしていると思惟していても、

思惟するあいだに現在は過去に退くからである。そもそも基底は、思惟できるのだろうか。これに対してジャンケレヴィッチ自身は、基底をわれわれがそれを生きるものとすることによって、基底を過去のみならず今の瞬間にまで拡大する。

ジャンケレヴィッチによれば、一八四二年と一八四五年の講義録『神話学の哲学への導入』でシェリングは、基底概念においては次のような主張、すなわち、「基底 (Grund) は、存在 (Ere) の充足理由であるが、それに対して存在 (Ere) は、むしろ基底の限定理由である」(OD, 32) という主張を認めない<sup>③</sup>。理由は、三つある。ひとつ目は、基底は静的なものではないからである。なるほど、基底は、存在の根拠であるが、それは論理的な理由ではない。二つ目は、基底がそれを基底とするものより先立っているという点で、過去であることは、基底が過去に存在したことではなく、基底が過去として現在に関わることだからである。つまり、シェリングにとつて基底それ自身は、過去ではなく、現在である。三つ目は、基底が存在の限定理由だからである。逆に、存在が基底の限定理由であるとは、原因の存在が基底に先立つことである。つまり、原因の存在の实在性は、基底の实在性より優勝的か、少なくとも同じくらいである。そうであるならば、過去の存在が、現在の基底を決定し、さらには現在を決定することになる。だが、シェリングが、基底が存在の限定理由であると主張するのは、存在の展開である「生成」において絶対的な理由はないということなのである。なるほど、過去がなければ現在はない。しかし、それは、現在が過去を土台にしているということである。

ジャンケレヴィッチによれば、シェリングの生成の哲学は、原因から結果へと降下する原因優位の理性の哲学ではなく、結果の基底、つまり現在の基底から原因の基底、つまり過去の基底へと上昇する「啓示 (Offenbarung)」の哲学である。現在がなければ過去がないのである。しかし、これは、過去がなければ現在はない、と矛盾しないか。

そうではない。現在も過去もひとつの存在の同じ基底だからある。シェリングは、過去を土台にして現在を生きているわれわれが自己自身の事象を分析する方法として、現在からその過去へ向かうことを提示している。ただし、向かうとはいっても、現在は現在の現在であり、過去は過去の現在であるので、それは、ある地点から別の地点へ方向的に移動することではない。現在の重層である基底を現在から過去へ、そしてその過去から現在へと生きることである。つまり、われわれは何かを反省し、何かを改める。現在が過去を照らしながらも、逆にそれと同時に過去は、現在を照らすのである。

では、シェリングは、存在がそれ自身の基底の過去と現在を単に自己回帰することを言いたいのか。そうではない。ジャンケレヴィッチは、次のように言う。「これからこの原理は、質料、器官、つまり、後の形の条件になるだろう。言い換えれば、この原理は、展開の主導権を握っていたし、その犠牲者でもあることになる」(op. cit.)。基底が同一の基底とはいっても、それは同じ川のようなものであって、生成のすべての段階での同一の基底なのではない。次から次へと基底は、時間の経過とともに過去へと後退していく。基底がなければ、生成は成立しないのだが、ひとつの同じ基底が現在に留まることは、逆に生成を妨げる。それゆえ、基底は、「展開の主導権」でありながらも、「展開」の「犠牲者」でなければならぬ。このことが、存在に過去、現在に加え、未来という時間の様相を産出するのである。

既にシェリングは、後期シェリングの端緒の作品、すなわち、人間の実践を考察した『人間の自由の本質についての哲学的探究』(二八〇九)において、二つ以上の存在者の相等化の反復である存在の論理的な展開ではなくて存在の創造的な展開を論じている<sup>(4)</sup>。それは、シェリングが示すように、主語と述語の同定である存在の同一性と言っても過言ではないだろう。しかし、シェリングは、存在の同一性を判断における主語と述語の同定に限定しているの

はない<sup>5)</sup>。ジャンケレヴィッチによれば、存在の自己展開の生成を探求するシェリングは、主語と述語の関係、つまり、「述語化」を「歴史的に」理解したということなのである。この「歴史的」な「述語化」においては、「本質から存在への移行」、「論理的なものから事実的なものへの移行」が重要となる。ニワトリを例に考えよう。

「…とは〜である」という本質主義の立場では、ニワトリの本質は、成長した未来のニワトリで現在の卵のニワトリではない。また、ヒナのニワトリもニワトリの本質ではない。けれども、ニワトリの本質は、未来において実現するとはいつても、無時間的なのである。だが、シェリングは、本質に代わるものを認めないのではない。なぜなら、シェリングは、人間存在や生物には、無時間的ではない過去としての「基底」が存在すると考えるからである。なるほど、主語である「私」は、既に「統一性」を持っているので、「主語の概念」と無関係ではない述語とそれを結び付けるが、「主語のその概念との隔たりは、ものその概念との隔たりと同じくらい大きい」(OD, 36)。主語は、事實的だがその概念は、可能的であり、同様に、ものは、事實的だがその概念は、可能的である。主語にせよ、ものにせよ、その概念が可能的なままであるのは、それが、言葉や論理、つまり、論理的な本質にすぎないからである。それゆえ、「論理的なものから事実的なものへの移行」のためには、つまり、「隔たりを乗り越えるためには、事實的な運動が必要である」(Ibid.)。

判断においては、「繫辞」の存在によって主語と述語の同一化がなされるのだが、ジャンケレヴィッチによれば、シェリングにおいて、「繫辞」に先立つ存在がある。ジャンケレヴィッチによれば、その例が、それぞれの部分がそこから相対的に独立している「生ける有機体」の存在である。この「有機体」において「可能的なもの」は、主語である「有機体」が持っている無限の可能性であり、「事實的なもの」は、この有機体なのである<sup>6)</sup>。しかもこの有機体は、過去を前提とするので、展開していくなかで、原因が結果になり結果が原因になる……を繰り返す。それゆ

え、有機体のそれぞれの部分が有機体の述語になることは、それぞれの部分が有機体の可能的なものであると同時に、  
事実的なものであることを示している。

以上より、ジャンケレヴィッチは、シエリングが、基底を媒介とすることで、可能的なものから事実的なものへの  
移行を一方的ではなく二つの双方向的な、つまり可逆的な運動として捉えたと考える。

## 第二節 基底

第二節では、どのようにジャンケレヴィッチが、シエリングの生成の哲学の基底概念を發展させたかを論じる。

ジャンケレヴィッチによれば、シエリングの基底は、「二重のパスペクティヴ」を持っている。ひとつは、「有機  
体のあらゆる未来が、基底において暗黙のうちに前もって形作られている」(OD, 40)ということである<sup>(7)</sup>。つまり、  
「胚は、将来の無言の約束である」(OD, 41)。もうひとつは、「基底が展開の反対物である」(OD, 40)ということであ  
る。すなわち、「約束「将来が行った無言の約束」は、それがけっして守られないことをまさに望んでいるだろう」  
(OD, 41)。なるほど、時間の時間化、つまり「生成」は、胚である基底が未来において事実化することを強いるが、  
胚である基底は、みずからすすんで事実化することはない。要するに、基底は、「生成」の一部であるが、同時に  
「生成」に対する「抵抗」である。基底が「生成」に対して「抵抗」なのは、現在の「胚」が未来において別なもの、  
少なくともそれと同一ではないものに変化するからである。しかし、基底は、生成の一部や「抵抗」であるが、生成  
の根拠でもある。なぜなら、基底は、生成の「内的なばね」だからである。「内的なばね」とは、「はなはだしく不均  
衡」であり、「生成にその存在根拠を与えるようになるか」<sup>(8)</sup>り<sup>(9)</sup><sup>(10)</sup><sup>(11)</sup><sup>(12)</sup><sup>(13)</sup><sup>(14)</sup><sup>(15)</sup><sup>(16)</sup><sup>(17)</sup><sup>(18)</sup><sup>(19)</sup><sup>(20)</sup><sup>(21)</sup><sup>(22)</sup><sup>(23)</sup><sup>(24)</sup><sup>(25)</sup><sup>(26)</sup><sup>(27)</sup><sup>(28)</sup><sup>(29)</sup><sup>(30)</sup><sup>(31)</sup><sup>(32)</sup><sup>(33)</sup><sup>(34)</sup><sup>(35)</sup><sup>(36)</sup><sup>(37)</sup><sup>(38)</sup><sup>(39)</sup><sup>(40)</sup><sup>(41)</sup><sup>(42)</sup><sup>(43)</sup><sup>(44)</sup><sup>(45)</sup><sup>(46)</sup><sup>(47)</sup><sup>(48)</sup><sup>(49)</sup><sup>(50)</sup><sup>(51)</sup><sup>(52)</sup><sup>(53)</sup><sup>(54)</sup><sup>(55)</sup><sup>(56)</sup><sup>(57)</sup><sup>(58)</sup><sup>(59)</sup><sup>(60)</sup><sup>(61)</sup><sup>(62)</sup><sup>(63)</sup><sup>(64)</sup><sup>(65)</sup><sup>(66)</sup><sup>(67)</sup><sup>(68)</sup><sup>(69)</sup><sup>(70)</sup><sup>(71)</sup><sup>(72)</sup><sup>(73)</sup><sup>(74)</sup><sup>(75)</sup><sup>(76)</sup><sup>(77)</sup><sup>(78)</sup><sup>(79)</sup><sup>(80)</sup><sup>(81)</sup><sup>(82)</sup><sup>(83)</sup><sup>(84)</sup><sup>(85)</sup><sup>(86)</sup><sup>(87)</sup><sup>(88)</sup><sup>(89)</sup><sup>(90)</sup><sup>(91)</sup><sup>(92)</sup><sup>(93)</sup><sup>(94)</sup><sup>(95)</sup><sup>(96)</sup><sup>(97)</sup><sup>(98)</sup><sup>(99)</sup><sup>(100)</sup><sup>(101)</sup><sup>(102)</sup><sup>(103)</sup><sup>(104)</sup><sup>(105)</sup><sup>(106)</sup><sup>(107)</sup><sup>(108)</sup><sup>(109)</sup><sup>(110)</sup><sup>(111)</sup><sup>(112)</sup><sup>(113)</sup><sup>(114)</sup><sup>(115)</sup><sup>(116)</sup><sup>(117)</sup><sup>(118)</sup><sup>(119)</sup><sup>(120)</sup><sup>(121)</sup><sup>(122)</sup><sup>(123)</sup><sup>(124)</sup><sup>(125)</sup><sup>(126)</sup><sup>(127)</sup><sup>(128)</sup><sup>(129)</sup><sup>(130)</sup><sup>(131)</sup><sup>(132)</sup><sup>(133)</sup><sup>(134)</sup><sup>(135)</sup><sup>(136)</sup><sup>(137)</sup><sup>(138)</sup><sup>(139)</sup><sup>(140)</sup><sup>(141)</sup><sup>(142)</sup><sup>(143)</sup><sup>(144)</sup><sup>(145)</sup><sup>(146)</sup><sup>(147)</sup><sup>(148)</sup><sup>(149)</sup><sup>(150)</sup><sup>(151)</sup><sup>(152)</sup><sup>(153)</sup><sup>(154)</sup><sup>(155)</sup><sup>(156)</sup><sup>(157)</sup><sup>(158)</sup><sup>(159)</sup><sup>(160)</sup><sup>(161)</sup><sup>(162)</sup><sup>(163)</sup><sup>(164)</sup><sup>(165)</sup><sup>(166)</sup><sup>(167)</sup><sup>(168)</sup><sup>(169)</sup><sup>(170)</sup><sup>(171)</sup><sup>(172)</sup><sup>(173)</sup><sup>(174)</sup><sup>(175)</sup><sup>(176)</sup><sup>(177)</sup><sup>(178)</sup><sup>(179)</sup><sup>(180)</sup><sup>(181)</sup><sup>(182)</sup><sup>(183)</sup><sup>(184)</sup><sup>(185)</sup><sup>(186)</sup><sup>(187)</sup><sup>(188)</sup><sup>(189)</sup><sup>(190)</sup><sup>(191)</sup><sup>(192)</sup><sup>(193)</sup><sup>(194)</sup><sup>(195)</sup><sup>(196)</sup><sup>(197)</sup><sup>(198)</sup><sup>(199)</sup><sup>(200)</sup><sup>(201)</sup><sup>(202)</sup><sup>(203)</sup><sup>(204)</sup><sup>(205)</sup><sup>(206)</sup><sup>(207)</sup><sup>(208)</sup><sup>(209)</sup><sup>(210)</sup><sup>(211)</sup><sup>(212)</sup><sup>(213)</sup><sup>(214)</sup><sup>(215)</sup><sup>(216)</sup><sup>(217)</sup><sup>(218)</sup><sup>(219)</sup><sup>(220)</sup><sup>(221)</sup><sup>(222)</sup><sup>(223)</sup><sup>(224)</sup><sup>(225)</sup><sup>(226)</sup><sup>(227)</sup><sup>(228)</sup><sup>(229)</sup><sup>(230)</sup><sup>(231)</sup><sup>(232)</sup><sup>(233)</sup><sup>(234)</sup><sup>(235)</sup><sup>(236)</sup><sup>(237)</sup><sup>(238)</sup><sup>(239)</sup><sup>(240)</sup><sup>(241)</sup><sup>(242)</sup><sup>(243)</sup><sup>(244)</sup><sup>(245)</sup><sup>(246)</sup><sup>(247)</sup><sup>(248)</sup><sup>(249)</sup><sup>(250)</sup><sup>(251)</sup><sup>(252)</sup><sup>(253)</sup><sup>(254)</sup><sup>(255)</sup><sup>(256)</sup><sup>(257)</sup><sup>(258)</sup><sup>(259)</sup><sup>(260)</sup><sup>(261)</sup><sup>(262)</sup><sup>(263)</sup><sup>(264)</sup><sup>(265)</sup><sup>(266)</sup><sup>(267)</sup><sup>(268)</sup><sup>(269)</sup><sup>(270)</sup><sup>(271)</sup><sup>(272)</sup><sup>(273)</sup><sup>(274)</sup><sup>(275)</sup><sup>(276)</sup><sup>(277)</sup><sup>(278)</sup><sup>(279)</sup><sup>(280)</sup><sup>(281)</sup><sup>(282)</sup><sup>(283)</sup><sup>(284)</sup><sup>(285)</sup><sup>(286)</sup><sup>(287)</sup><sup>(288)</sup><sup>(289)</sup><sup>(290)</sup><sup>(291)</sup><sup>(292)</sup><sup>(293)</sup><sup>(294)</sup><sup>(295)</sup><sup>(296)</sup><sup>(297)</sup><sup>(298)</sup><sup>(299)</sup><sup>(300)</sup><sup>(301)</sup><sup>(302)</sup><sup>(303)</sup><sup>(304)</sup><sup>(305)</sup><sup>(306)</sup><sup>(307)</sup><sup>(308)</sup><sup>(309)</sup><sup>(310)</sup><sup>(311)</sup><sup>(312)</sup><sup>(313)</sup><sup>(314)</sup><sup>(315)</sup><sup>(316)</sup><sup>(317)</sup><sup>(318)</sup><sup>(319)</sup><sup>(320)</sup><sup>(321)</sup><sup>(322)</sup><sup>(323)</sup><sup>(324)</sup><sup>(325)</sup><sup>(326)</sup><sup>(327)</sup><sup>(328)</sup><sup>(329)</sup><sup>(330)</sup><sup>(331)</sup><sup>(332)</sup><sup>(333)</sup><sup>(334)</sup><sup>(335)</sup><sup>(336)</sup><sup>(337)</sup><sup>(338)</sup><sup>(339)</sup><sup>(340)</sup><sup>(341)</sup><sup>(342)</sup><sup>(343)</sup><sup>(344)</sup><sup>(345)</sup><sup>(346)</sup><sup>(347)</sup><sup>(348)</sup><sup>(349)</sup><sup>(350)</sup><sup>(351)</sup><sup>(352)</sup><sup>(353)</sup><sup>(354)</sup><sup>(355)</sup><sup>(356)</sup><sup>(357)</sup><sup>(358)</sup><sup>(359)</sup><sup>(360)</sup><sup>(361)</sup><sup>(362)</sup><sup>(363)</sup><sup>(364)</sup><sup>(365)</sup><sup>(366)</sup><sup>(367)</sup><sup>(368)</sup><sup>(369)</sup><sup>(370)</sup><sup>(371)</sup><sup>(372)</sup><sup>(373)</sup><sup>(374)</sup><sup>(375)</sup><sup>(376)</sup><sup>(377)</sup><sup>(378)</sup><sup>(379)</sup><sup>(380)</sup><sup>(381)</sup><sup>(382)</sup><sup>(383)</sup><sup>(384)</sup><sup>(385)</sup><sup>(386)</sup><sup>(387)</sup><sup>(388)</sup><sup>(389)</sup><sup>(390)</sup><sup>(391)</sup><sup>(392)</sup><sup>(393)</sup><sup>(394)</sup><sup>(395)</sup><sup>(396)</sup><sup>(397)</sup><sup>(398)</sup><sup>(399)</sup><sup>(400)</sup><sup>(401)</sup><sup>(402)</sup><sup>(403)</sup><sup>(404)</sup><sup>(405)</sup><sup>(406)</sup><sup>(407)</sup><sup>(408)</sup><sup>(409)</sup><sup>(410)</sup><sup>(411)</sup><sup>(412)</sup><sup>(413)</sup><sup>(414)</sup><sup>(415)</sup><sup>(416)</sup><sup>(417)</sup><sup>(418)</sup><sup>(419)</sup><sup>(420)</sup><sup>(421)</sup><sup>(422)</sup><sup>(423)</sup><sup>(424)</sup><sup>(425)</sup><sup>(426)</sup><sup>(427)</sup><sup>(428)</sup><sup>(429)</sup><sup>(430)</sup><sup>(431)</sup><sup>(432)</sup><sup>(433)</sup><sup>(434)</sup><sup>(435)</sup><sup>(436)</sup><sup>(437)</sup><sup>(438)</sup><sup>(439)</sup><sup>(440)</sup><sup>(441)</sup><sup>(442)</sup><sup>(443)</sup><sup>(444)</sup><sup>(445)</sup><sup>(446)</sup><sup>(447)</sup><sup>(448)</sup><sup>(449)</sup><sup>(450)</sup><sup>(451)</sup><sup>(452)</sup><sup>(453)</sup><sup>(454)</sup><sup>(455)</sup><sup>(456)</sup><sup>(457)</sup><sup>(458)</sup><sup>(459)</sup><sup>(460)</sup><sup>(461)</sup><sup>(462)</sup><sup>(463)</sup><sup>(464)</sup><sup>(465)</sup><sup>(466)</sup><sup>(467)</sup><sup>(468)</sup><sup>(469)</sup><sup>(470)</sup><sup>(471)</sup><sup>(472)</sup><sup>(473)</sup><sup>(474)</sup><sup>(475)</sup><sup>(476)</sup><sup>(477)</sup><sup>(478)</sup><sup>(479)</sup><sup>(480)</sup><sup>(481)</sup><sup>(482)</sup><sup>(483)</sup><sup>(484)</sup><sup>(485)</sup><sup>(486)</sup><sup>(487)</sup><sup>(488)</sup><sup>(489)</sup><sup>(490)</sup><sup>(491)</sup><sup>(492)</sup><sup>(493)</sup><sup>(494)</sup><sup>(495)</sup><sup>(496)</sup><sup>(497)</sup><sup>(498)</sup><sup>(499)</sup><sup>(500)</sup><sup>(501)</sup><sup>(502)</sup><sup>(503)</sup><sup>(504)</sup><sup>(505)</sup><sup>(506)</sup><sup>(507)</sup><sup>(508)</sup><sup>(509)</sup><sup>(510)</sup><sup>(511)</sup><sup>(512)</sup><sup>(513)</sup><sup>(514)</sup><sup>(515)</sup><sup>(516)</sup><sup>(517)</sup><sup>(518)</sup><sup>(519)</sup><sup>(520)</sup><sup>(521)</sup><sup>(522)</sup><sup>(523)</sup><sup>(524)</sup><sup>(525)</sup><sup>(526)</sup><sup>(527)</sup><sup>(528)</sup><sup>(529)</sup><sup>(530)</sup><sup>(531)</sup><sup>(532)</sup><sup>(533)</sup><sup>(534)</sup><sup>(535)</sup><sup>(536)</sup><sup>(537)</sup><sup>(538)</sup><sup>(539)</sup><sup>(540)</sup><sup>(541)</sup><sup>(542)</sup><sup>(543)</sup><sup>(544)</sup><sup>(545)</sup><sup>(546)</sup><sup>(547)</sup><sup>(548)</sup><sup>(549)</sup><sup>(550)</sup><sup>(551)</sup><sup>(552)</sup><sup>(553)</sup><sup>(554)</sup><sup>(555)</sup><sup>(556)</sup><sup>(557)</sup><sup>(558)</sup><sup>(559)</sup><sup>(560)</sup><sup>(561)</sup><sup>(562)</sup><sup>(563)</sup><sup>(564)</sup><sup>(565)</sup><sup>(566)</sup><sup>(567)</sup><sup>(568)</sup><sup>(569)</sup><sup>(570)</sup><sup>(571)</sup><sup>(572)</sup><sup>(573)</sup><sup>(574)</sup><sup>(575)</sup><sup>(576)</sup><sup>(577)</sup><sup>(578)</sup><sup>(579)</sup><sup>(580)</sup><sup>(581)</sup><sup>(582)</sup><sup>(583)</sup><sup>(584)</sup><sup>(585)</sup><sup>(586)</sup><sup>(587)</sup><sup>(588)</sup><sup>(589)</sup><sup>(590)</sup><sup>(591)</sup><sup>(592)</sup><sup>(593)</sup><sup>(594)</sup><sup>(595)</sup><sup>(596)</sup><sup>(597)</sup><sup>(598)</sup><sup>(599)</sup><sup>(600)</sup><sup>(601)</sup><sup>(602)</sup><sup>(603)</sup><sup>(604)</sup><sup>(605)</sup><sup>(606)</sup><sup>(607)</sup><sup>(608)</sup><sup>(609)</sup><sup>(610)</sup><sup>(611)</sup><sup>(612)</sup><sup>(613)</sup><sup>(614)</sup><sup>(615)</sup><sup>(616)</sup><sup>(617)</sup><sup>(618)</sup><sup>(619)</sup><sup>(620)</sup><sup>(621)</sup><sup>(622)</sup><sup>(623)</sup><sup>(624)</sup><sup>(625)</sup><sup>(626)</sup><sup>(627)</sup><sup>(628)</sup><sup>(629)</sup><sup>(630)</sup><sup>(631)</sup><sup>(632)</sup><sup>(633)</sup><sup>(634)</sup><sup>(635)</sup><sup>(636)</sup><sup>(637)</sup><sup>(638)</sup><sup>(639)</sup><sup>(640)</sup><sup>(641)</sup><sup>(642)</sup><sup>(643)</sup><sup>(644)</sup><sup>(645)</sup><sup>(646)</sup><sup>(647)</sup><sup>(648)</sup><sup>(649)</sup><sup>(650)</sup><sup>(651)</sup><sup>(652)</sup><sup>(653)</sup><sup>(654)</sup><sup>(655)</sup><sup>(656)</sup><sup>(657)</sup><sup>(658)</sup><sup>(659)</sup><sup>(660)</sup><sup>(661)</sup><sup>(662)</sup><sup>(663)</sup><sup>(664)</sup><sup>(665)</sup><sup>(666)</sup><sup>(667)</sup><sup>(668)</sup><sup>(669)</sup><sup>(670)</sup><sup>(671)</sup><sup>(672)</sup><sup>(673)</sup><sup>(674)</sup><sup>(675)</sup><sup>(676)</sup><sup>(677)</sup><sup>(678)</sup><sup>(679)</sup><sup>(680)</sup><sup>(681)</sup><sup>(682)</sup><sup>(683)</sup><sup>(684)</sup><sup>(685)</sup><sup>(686)</sup><sup>(687)</sup><sup>(688)</sup><sup>(689)</sup><sup>(690)</sup><sup>(691)</sup><sup>(692)</sup><sup>(693)</sup><sup>(694)</sup><sup>(695)</sup><sup>(696)</sup><sup>(697)</sup><sup>(698)</sup><sup>(699)</sup><sup>(700)</sup><sup>(701)</sup><sup>(702)</sup><sup>(703)</sup><sup>(704)</sup><sup>(705)</sup><sup>(706)</sup><sup>(707)</sup><sup>(708)</sup><sup>(709)</sup><sup>(710)</sup><sup>(711)</sup><sup>(712)</sup><sup>(713)</sup><sup>(714)</sup><sup>(715)</sup><sup>(716)</sup><sup>(717)</sup><sup>(718)</sup><sup>(719)</sup><sup>(720)</sup><sup>(721)</sup><sup>(722)</sup><sup>(723)</sup><sup>(724)</sup><sup>(725)</sup><sup>(726)</sup><sup>(727)</sup><sup>(728)</sup><sup>(729)</sup><sup>(730)</sup><sup>(731)</sup><sup>(732)</sup><sup>(733)</sup><sup>(734)</sup><sup>(735)</sup><sup>(736)</sup><sup>(737)</sup><sup>(738)</sup><sup>(739)</sup><sup>(740)</sup><sup>(741)</sup><sup>(742)</sup><sup>(743)</sup><sup>(744)</sup><sup>(745)</sup><sup>(746)</sup><sup>(747)</sup><sup>(748)</sup><sup>(749)</sup><sup>(750)</sup><sup>(751)</sup><sup>(752)</sup><sup>(753)</sup><sup>(754)</sup><sup>(755)</sup><sup>(756)</sup><sup>(757)</sup><sup>(758)</sup><sup>(759)</sup><sup>(760)</sup><sup>(761)</sup><sup>(762)</sup><sup>(763)</sup><sup>(764)</sup><sup>(765)</sup><sup>(766)</sup><sup>(767)</sup><sup>(768)</sup><sup>(769)</sup><sup>(770)</sup><sup>(771)</sup><sup>(772)</sup><sup>(773)</sup><sup>(774)</sup><sup>(775)</sup><sup>(776)</sup><sup>(777)</sup><sup>(778)</sup><sup>(779)</sup><sup>(780)</sup><sup>(781)</sup><sup>(782)</sup><sup>(783)</sup><sup>(784)</sup><sup>(785)</sup><sup>(786)</sup><sup>(787)</sup><sup>(788)</sup><sup>(789)</sup><sup>(790)</sup><sup>(791)</sup><sup>(792)</sup><sup>(793)</sup><sup>(794)</sup><sup>(795)</sup><sup>(796)</sup><sup>(797)</sup><sup>(798)</sup><sup>(799)</sup><sup>(800)</sup><sup>(801)</sup><sup>(802)</sup><sup>(803)</sup><sup>(804)</sup><sup>(805)</sup><sup>(806)</sup><sup>(807)</sup><sup>(808)</sup><sup>(809)</sup><sup>(810)</sup><sup>(811)</sup><sup>(812)</sup><sup>(813)</sup><sup>(814)</sup><sup>(815)</sup><sup>(816)</sup><sup>(817)</sup><sup>(818)</sup><sup>(819)</sup><sup>(820)</sup><sup>(821)</sup><sup>(822)</sup><sup>(823)</sup><sup>(824)</sup><sup>(825)</sup><sup>(826)</sup><sup>(827)</sup><sup>(828)</sup><sup>(829)</sup><sup>(830)</sup><sup>(831)</sup><sup>(832)</sup><sup>(833)</sup><sup>(834)</sup><sup>(835)</sup><sup>(836)</sup><sup>(837)</sup><sup>(838)</sup><sup>(839)</sup><sup>(840)</sup><sup>(841)</sup><sup>(842)</sup><sup>(843)</sup><sup>(844)</sup><sup>(845)</sup><sup>(846)</sup><sup>(847)</sup><sup>(848)</sup><sup>(849)</sup><sup>(850)</sup><sup>(851)</sup><sup>(852)</sup><sup>(853)</sup><sup>(854)</sup><sup>(855)</sup><sup>(856)</sup><sup>(857)</sup><sup>(858)</sup><sup>(859)</sup><sup>(860)</sup><sup>(861)</sup><sup>(862)</sup><sup>(863)</sup><sup>(864)</sup><sup>(865)</sup><sup>(866)</sup><sup>(867)</sup><sup>(868)</sup><sup>(869)</sup><sup>(870)</sup><sup>(871)</sup><sup>(872)</sup><sup>(873)</sup><sup>(874)</sup><sup>(875)</sup><sup>(876)</sup><sup>(877)</sup><sup>(878)</sup><sup>(879)</sup><sup>(880)</sup><sup>(881)</sup><sup>(882)</sup><sup>(883)</sup><sup>(884)</sup><sup>(885)</sup><sup>(886)</sup><sup>(887)</sup><sup>(888)</sup><sup>(889)</sup><sup>(890)</sup><sup>(891)</sup><sup>(892)</sup><sup>(893)</sup><sup>(894)</sup><sup>(895)</sup><sup>(896)</sup><sup>(897)</sup><sup>(898)</sup><sup>(899)</sup><sup>(900)</sup><sup>(901)</sup><sup>(902)</sup><sup>(903)</sup><sup>(904)</sup><sup>(905)</sup><sup>(906)</sup><sup>(907)</sup><sup>(908)</sup><sup>(909)</sup><sup>(910)</sup><sup>(911)</sup><sup>(912)</sup><sup>(913)</sup><sup>(914)</sup><sup>(915)</sup><sup>(916)</sup><sup>(917)</sup><sup>(918)</sup><sup>(919)</sup><sup>(920)</sup><sup>(921)</sup><sup>(922)</sup><sup>(923)</sup><sup>(924)</sup><sup>(925)</sup><sup>(926)</sup><sup>(927)</sup><sup>(928)</sup><sup>(929)</sup><sup>(930)</sup><sup>(931)</sup><sup>(932)</sup><sup>(933)</sup><sup>(934)</sup><sup>(935)</sup><sup>(936)</sup><sup>(937)</sup><sup>(938)</sup><sup>(939)</sup><sup>(940)</sup><sup>(941)</sup><sup>(942)</sup><sup>(943)</sup><sup>(944)</sup><sup>(945)</sup><sup>(946)</sup><sup>(947)</sup><sup>(948)</sup><sup>(949)</sup><sup>(950)</sup><sup>(951)</sup><sup>(952)</sup><sup>(953)</sup><sup>(954)</sup><sup>(955)</sup><sup>(956)</sup><sup>(957)</sup><sup>(958)</sup><sup>(959)</sup><sup>(960)</sup><sup>(961)</sup><sup>(962)</sup><sup>(963)</sup><sup>(964)</sup><sup>(965)</sup><sup>(966)</sup><sup>(967)</sup><sup>(968)</sup><sup>(969)</sup><sup>(970)</sup><sup>(971)</sup><sup>(972)</sup><sup>(973)</sup><sup>(974)</sup><sup>(975)</sup><sup>(976)</sup><sup>(977)</sup><sup>(978)</sup><sup>(979)</sup><sup>(980)</sup><sup>(981)</sup><sup>(982)</sup><sup>(983)</sup><sup>(984)</sup><sup>(985)</sup><sup>(986)</sup><sup>(987)</sup><sup>(988)</sup><sup>(989)</sup><sup>(990)</sup><sup>(991)</sup><sup>(992)</sup><sup>(993)</sup><sup>(994)</sup><sup>(995)</sup><sup>(996)</sup><sup>(997)</sup><sup>(998)</sup><sup>(999)</sup>1000

では、基底の三つの様相の関係、すなわち、「生成」、「抵抗」、「根拠」の関係は、どのような関係であるのか。ジャンケレヴィッチは、基底は、絶えず生成を続けさせる (cf. OD, 40)、つまり、基底は、いつも生成を基礎付けるという主張を第一としたうえで次のように言う。「基底は、諸々の力の最大の張りを示し、そしてその結果、「諸々の力の不安定性を示す。基底は、圧縮されている諸々の力が自由に開花するのを可能にする修復プロセスを実際に始める」(OD, 40)。

なぜ「修復プロセス」なのか。なぜなら、現在の基底が、過去になるのとは逆に、この場合、基底が、現在を肯定するからである。「圧縮されている諸々の力」である諸瞬間は、現在である。基底は、今度は、瞬間をそれぞれ自由に出現させ現在を認めるのである。つまり、瞬間の「抵抗」である。「それゆえ、運動は運動の否定とともに始まる。すなわち、休息は、運動の《基底》である」(OD, 41)。

ここでジャンケレヴィッチは、シエリングと一線を画す。なぜなら、シエリングは、「持続を無益なものとするようなあらゆる叙述の論理」(OD, 35)を批判しているながらも、持続が瞬間の非連続の連続であることを十分に論じていないからである。ジャンケレヴィッチによれば、瞬間の生成消滅とは、この「運動の《基底》」の二重性である。瞬間の消滅とは、この瞬間が、そして現在が過去になることである。それは、未来が可能的なものから事実的なものになることに至る。一方、瞬間の生成とは、この瞬間が無から生じることである。この瞬間は過去化とは無関係である。それゆえ、瞬間の生成は、「生成」の「否定」、つまり「運動の否定」である。瞬間は、「休息」、すなわち、「運動」の中断なのである。

彼は、このような運動の基底の二重性に基底の二つの意味を見出している。それは、持続と瞬間である。言い換えれば、過去を前提とする「展開」とそうした「展開」の「否定」の「無」である。したがって、彼は次のように言

う。「線は、点で始まる。点とは、単数性による線と数の連続の否定であり、多数性を否定する」(OD, 41)。「線」  
「多数性」は、持続、持続性であり、「点」、「単数性」は、瞬間、瞬間性である。

しかし、これは、先に明らかにした基底の三つの様相と矛盾するのではないか。そうではない。なぜなら、「生成」の基底、「抵抗」の基底、根拠の基底はいずれも瞬間だからである。「線は、点で始まる」とは、持続は瞬間で始まるということである。けれども、これは、持続に対する瞬間の優位であつて<sup>(8)</sup>、最初の瞬間が持続の「全体」を決定するのではない。ジャンケレヴィッチは、このような持続と瞬間の関係を事象の両義性、すなわち、「学問」と「打ち破られる無知」、「意志」と「拒否」、「調和」と「不調和」、「喜び」と「乗り越えられる悲しみ」の關係で説明する。順々に見ていきたい。

まず、「学問」と「打ち破られる無知」である。学問は、長年の知の蓄積だが、新しいことを知るためには無知でなければならぬ。無知は、無知によって克服される。次に、「意志」と「拒否」である。意志は、何かを強く絶え間なく望むことだが、それはそれ以外のものをすべて絶えず退けることである。もちろん、拒否の意志もあるが、それは、何かを絶えず拒否する以外のことを絶えず退ける。さらに、「調和」と「不調和」である。調和は、諸部分の集まりの調和だが、ひとつひとつの部分それ自身は、調和ではなく、不調和である。例えば、メロデーは、調和であるが、ひとつひとつの音は、不調和である。それゆえ、ひとつひとつの音が(いつかは)消えていくからこそ、音の調和は成立する。そして、「喜び」と「乗り越えられる悲しみ」である。喜びは、ひとにさまざまに訪れる悲しみによって中断される。しかし、その悲しみは、消えないが、時の経過によって薄らぐ。そうすることでひとは、喜びを取り戻す。というのも、時の経過は、忘却をもたらし、喜びにつながるからである。

ジャンケレヴィッチは、同一性には、それが否定する差異が必要不可欠である (cf. OD, 41) と述べているが、

これは、以上のような持続と瞬間の関係にも妥当する。彼にとって、同一性とは、過去—現在—未来の持続であり、差異とはひとつひとつの瞬間である。しかし、この二つの関係とは、そもそもどのようなものなのか。彼は、それを明らかにするためにシエリングの基底に着目したのではないか。彼は、次のように言う。「基底、つまり、被造物と神自身の現実性 (actualité) が産まれる存在のこの暗い実験室が、それゆえ、まさしく本来的に両生体系 (amphibiotique) である。すなわち、ヤコブ・ペーメの《無基底》のように、全体 (Tout) なのは、無 (Rien) である」(OD, 6)。「存在」とは、「瞬間」であり、「被造物と神自身の現実性」とは、この場合は、持続であるのだが、この二つが、二つでありながら合致しているのである。つまり、原因の瞬間がそのままではないにせよ結果の持続に顕在化している。なぜなら、原因と結果がひとつの「全体」だからである。それを可能にするのが、無である。というのも、持続の無が瞬間であり、瞬間の無が持続だからである。

したがってジャンケレヴィッチにとって、基底とは、「無」である。

### 第三節 無の基底

第三節では、どのように基底はわれわれに働きかけるのかを明らかにする。ジャンケレヴィッチによれば、それは、無化という仕方である。

ジャンケレヴィッチの基底概念を時間として考えるならば、それは瞬間とあいだ、すなわち、瞬間と瞬間のあいだに見出される。しかし、それは、瞬間が消滅し、その瞬間と次の瞬間のあいだも消えることではない。そもそも、瞬間が消えるのだから、瞬間と瞬間のあいだが存在するかという問題もあるだろう。



では、ジャンケレヴィッチは、瞬間や瞬間と瞬間のあいだで何を言いたいのか。それは、持続に対する「抵抗」である (cf. OD, 42-44)。なるほど、瞬間は、定義上、生成消滅するのだが、瞬間が実際にそうなるかはそうならないと分らないからである。これは、持続にとっては「脅威」である。なぜなら、瞬間が残ることで時間の可逆性が可能になるからである。彼によれば、これは、瞬間の時間に対する「抵抗」、つまり、無化と言えるのではないかな。ぜなら、それは、「抵抗」が、論理的否定ではなくて現実的否定だからである。

しかし、時間の前進性、つまり時間の不可逆性に対する「抵抗」が無化であるとしても、それは、厳密には、ジャンケレヴィッチの言う無化ではない。ちなみに、彼は、そのような「反抗的な基底」は、過去が全瞬間に働いていると考える「シェリングのロマン主義的思索」(OD, 44)と矛盾しないと論じる。ジャンケレヴィッチによれば、瞬間の「抵抗」や瞬間と瞬間のあいだの「抵抗」は、時間の均一化を妨げるが、その抵抗が「永遠化する」と問題が生じてしまう。なぜなら、時間が流れなくなるからである。それゆえ、彼は、「抵抗」が、現在の抵抗から過去の抵抗にならねばならないと論じる。過去が、「抵抗」と時間の流れを総合し、その結果が生成なのである。そもそも、過去がなければ、「抵抗」も時間の流れもないのではないのだろうか<sup>9)</sup>。

だが、彼は、次のように言う。「過去が負けるのは、何かに役立つためだけである。過去は、過程に王座を与え、また、その過程に基盤と支えを与える」(OD, 31)。過去は、時間の始まりの「王座」であり、時間の流れの「基盤」と「支え」である。つまり、「基底」なのである。しかし、「何か」、すなわち、時間の流れのために、過去は「負ける」、つまり、意識から退く必要がある。だが、過去はただ単に「意識」から退くのみではない。「過去は、シェリングの持続においては、意識に吸収されはしない。なぜなら、意識は、相つぐ新しさが意識にたどり着くにつれて、その相つぐ新しさを同化するからである。過去は、根強く残る (subsist)。しかし、それは、生きているものが「何か

を」批判するようにであり、しゃべれないひとが、いつも一時的で異論をはさまれるような暫定的な勝利を証言するようにである」(OD, 4)。なるほど、過去は、自分のことを、自分の現在を「しゃべれない」。けれども、過去は、あたかも「生きているもの」であるかのようである。なぜなら、過去は、過去化を通じて、時間のあらゆる時制に存在するからである。

いかなる方法でわれわれは、このような過去による過去化を体系的に理解するのか。

彼によれば、それは、「精神を自然化する」ことよって可能である。精神を自然化することは、精神を観念化することではない。というのも、何かを観念化することが、何かから多様性や偶然性を奪い、その何かを純粹な何かにしてしまうことであるのと同様に、精神の観念化は、精神の純粹化だからである。また、精神はものではないので、精神を自然化するとは、精神という働きを自然化することである。つまり、精神という働きの純粹化を無化することである。過去も純粹化を拒否する。というのも、過去といつても、われわれには無数の過去があるし、現在が過去になることは必然だが、過去の内実は偶然だからである。それゆえ、このような過去を生きたためには、自然化された精神が必要なのである。では、自然化された精神は、どのような精神か。

ジャンケレヴィッチによれば、自然化された精神は、「自分が由来する濁りながらも根本的な力の前兆」にさらされていく。この「力」は、「基底」である。そうであるならば、なぜ彼は、精神は、「力」にさらされているのではなく、「力の前兆」にさらされていると論じるのだろうか。それは、先に述べたように、基底は「無」だからである。われわれは、現在と同時に基底を知覚することはできない。われわれは、基底が過ぎ去ったあとで基底を知覚できるようにすぎない。基底は、現在から過去へと絶えず移動している。それゆえ、基底は生成の始まりであるにもかかわらず、われわれは、その始まりがいつであるかを知らない。

ジャンケレヴィッチは、この基底についての知覚の構造と自己についての精神の（自己）知の構造は、アナロジーの関係であると考えている。それゆえ、彼によれば、「基底」は、「精神の最小の弱点を狙う」。「精神の最小の弱点」とは、「精神」が、対格の自己自身であると同時に主格の自己であることはできないことである。主格の自己である「私」が把握する自己自身は、ひとつ前の過去なのである。それゆえ、逆にこれは、「精神」の最大の「弱点」ではないだろうか。そもそも、精神は、自己自身を含む内界や外界の一切を概念化してしまう。彼は、それを「観念論的思い上がり」と言う。その際われわれは、十分には知らないことを知っていると考えている。その理由は、われわれが、既知と思いついでいることを未知な事柄に投影するからである<sup>100</sup>。彼が、われわれは基底をよく知らないし自己のこともよく知らない<sup>101</sup>と論じることは、この「観念論的思いつき」への批判なのである。われわれは、知らないということを知っているにすぎない。つまり、無知の知である。

この批判は、三つの例からなされると考えられる。ジャンケレヴィッチは、この例を提示することで無の無化の働きを明らかにするのではないだろうか。

ひとつ目は、いま言及している精神である。彼は、次のように言う。「精神は、それが理性を備えているとしても、無垢ではない。野生でとても古い原理が、つまり、われわれの内的な文明を永遠に脅かす、時間の起源の証言が、精神において眠らずにいる」(OD, 44)。なるほど、精神は、「理性を備えている」ので、理性的であるが、「理性」ではない。なぜなら、「時間の起源」が、「われわれの内的な文明」の、つまり、精神の「規範性」の純粹さを妨げるからである。さらに、「時間の起源」は、そうすることで、現在が純粹な現在であることも妨げる。というのも、「時間の起源」は、「野生的でとても古い原理」だからである。ここでジャンケレヴィッチは、次のように言う。「かくして必然性は、自由のなかで存続する。すなわち、自然は精神のなかで、非我は自我のなかで存続する」(OD, 45)。「必

然性」とは、「時間の起源」が、現在の精神に必ず到来するという「必然性」である。「自然」の「非我」は、「精神」の「自我」と混じり合う。精神は純粹な精神ではなくなり、「自我」と「非我」の混合体となる。それゆえ、「時間の起源」は、現在の精神を否定することになる。しかし、それは精神に代わるものを措定することでもないし、過去の精神を肯定することでもない。現在が現在であることの条件とは、過去を前提としながらも、現在が過去によって否定されることである。このことが、無化なのである。

二つ目は、神である。ジャンケレヴィッチは次のように言う。「神自身は、顕現するために非—神を必要とする。すなわち、神は、ひとが想像するような空虚で規定されていない《存在 (ans)》ではないし、神の本性が神の内部なのである」(OD, 45)。「神」が外部に対して現れる時、その現れは、ものではなく働きである。「非—神」とは、神と同一の次元に存在するので存在者ではない。その意味で無である。それゆえ、神の働きは存在者というあり方を否定する無化なのである。しかし、神は、「空虚で規定されない《存在》」、つまり、存在を前提とする無でもない。なぜなら、存在は、無の本質だからである。彼のこの主張と違って、一般に哲学において本質とは、何であるかの問いであり、存在の問いではなく (cf. OD, 171)。存在の問いとは、存在を問うのではなく、「それが存在する」ということを記述することである。彼は、「それが存在する」ということが、神の本質ではなく「神の本性」であると考える。「それが存在する」ということは、「それ」に関してはそのこと以外を否定している。少なくとも積極的には肯定しないだろう。「それが存在する」ということの肯定が、「それ」の内部を作り、一方で、「それが存在する」ということ以外を否定することが外界を作る。したがって、神の働きは、自分の存在以外の否定にならないだろうか。そうならば、神と「私」は同じことにならないか。だが、同じではない。なぜなら、「私」は、時間性によって否定されるが、神は、それが永遠である限りは、時間性によっては（完全には）否定されないからである。

三つ目は、「宇宙」である。ジャンケレヴィッチによれば、宇宙は、「精神」と「神」のいずれでもない他である。宇宙は、この二つと異なる他ではなくて「この二つの他」なのである。宇宙をこの二つと異なる他と語る場合、それは、「精神」、「神」との比較によって二つとの類似も少ないながらも持っていることになる。一方、宇宙をこの二つの他と語る場合、それは、この二つとの類似を持っているのではなく他である<sup>10)</sup>。しかし、いかにして「この二つの他」を語ることができるのか。それは、この二つと異なる他の否定によってではなくて、この二つと異なる他であることと語ることの否定によってである。前者は、語りの内容の否定であり、この二つの肯定にすぎない二重否定だが、後者は、語り方の否定であり、無化である。

彼は、精神の例が提示する過去性、神の例が問いかける存在性を踏まえながら、次のように言う。「こういうわけで宇宙は、教条主義の独断的主張にもかかわらず、ことごとく単純な概念に変換可能であるわけではない。いつもわれわれの法則と事実性 (realité) のあいだには、「二つの関係を」裏切るある余白が、言い換えれば、夜の原則の抗議がある」(OD, 45)。彼によれば、すべてを概念化できると考える「教条主義」は、「宇宙」の経験ではなく「宇宙」を語ることに留まる。なるほど、概念的法則と実在のあいだには、概念が適用されるという関係がある。例えば、三方の定理は、どんな場所にもどんなものにも妥当する。しかし、これが完全にすべてに妥当するかというとそれは明確ではない。三方の定理が妥当しない空間も存在するかもしれない。それも、ジャンケレヴィッチの言う「事実性」なのである。われわれとその「事実性」のあいだには、「法則」は存在しない。「余白」が、存在する。しかし、われわれは、それを語り得ない。なぜなら、「余白」は、「法則」のことばで語るものではなくて、われわれがそれを経験し、それを生きるものだからである。

以上より、無化は、「存在は、観念論に反して思惟に先立つ」(OD, 174) のをわれわれに明らかにする働きなので

ある。

### 結びに代えて

ジャンケレヴィッチによれば、われわれは、非存在的可能性と現実的存在のあいだでさまざまな選択をしなければならぬ (cf. OD, 145)。なぜなら、われわれは、何かであるためには、それ以外のあらゆる可能性、つまり、ある意味で無限な可能性をそのつどの瞬間において捨てなければならぬからである<sup>12)</sup>。

時間を生きているわれわれにとつて基底は、存在と可能性を結び付けて現実的存在、つまり現在を生成する積極的な無である。

### 註

- (1) Vladimir Jankélévitch, *L'odyssée de la conscience dans la dernière philosophie de Schelling, préface de Xavier Tilliette, L'Harmattan, 2005.* 以下ODと略記し、略号と頁数を記す。( )でジャンケレヴィッチについて簡単に説明しておきたい。ジャンケレヴィッチは、存在を「ほとんど―無」と捉え、存在が時間の時間性において現れることのうちに芸術や道徳の創造を見出している。哲学的には、アンリ・ベルクソン (1859-1941) の影響を受けていると言われている。これについては、以下の電子辞書の人名項目の記述を参照した。「ジャンケレヴィチ」、『百科事典マイペディア』、日立システムアンドサービス、二〇〇五年。

- (2) ジャンケレヴィッチは、シェリングの哲学に同一哲学の時期 (1800-1809) を認めながらも、シェリングの哲学において、これがこれであることは、これがそれではないことであり、つまり、「同一性」は「差異性」を前提すると考えている。なお、シェリングの同一哲学については、次の研究書を参考にした。須田朗『もう少し知りたい人のための「ソフィーの世界」哲学ガイド』、日本放送出版協会、一九九六年。著者は、次のように言う。「シェリングによると、自然は目に見える精

神で、わたしたちの精神は目に見えない自然です。自然も精神も、それだけ切り離してみられると、いずれも一面的なものになります。自然と精神の両者を貫く一つのが、絶対的なものです。シェリングは「絶対者」ということばを使っています。この同じ一つの絶対者が、精神になったり物質になったりして現れる、というのです。これが同一哲学といわれる考え方です。シェリングは、スピノザが「自然は神だ」といったことを高く評価しました。ただ、スピノザの自然は機械論的な自然、生命のない自然でした。シェリングの自然は違います。シェリングの自然は、何よりもまず生命的です。シェリングは、宇宙が一つの生命だと考えたのです」(一四〇—一四一頁)。

(3) Vgl. Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, *Einführung in die Philosophie der Mythologie*, Inkrank publishing, 2018, S.311.

(4) Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, *Philosophische Untersuchungen über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände*, Henricus Grobdruck, 2020. シェリングによれば、基底が存在 (Existenz) にしか働かない場合が、「悪」である。つまり、意識の自己保存の状態である。基底は、「存在に向かう原基底」(S.54)としての基底から「存在に向かう、創造された本質 (Wesen)」(Ebd.)としての基底に発展しなければならない。他者との世界である「自然において働いている基底のより高次な力」(Ebd.)は、行為においてのみ明らかになる。シェリングは、この基底の発展を「啓示」と言う。

シェリングは、次のように言う。「基底は、啓示に向かう単なる意志である。しかし、まさしく、次のことは、これによって間違いないであろう。すなわち、基底は、その固有性 (Eigenheit) とそれと反対のものを呼び起こすに違いないということである。かくして、愛の意志と基底の意志は、まさに以下のことによつて、ひとつになる。すなわち、二つの意志は、区別されていて、それぞれの初めからそれぞれのために働くということである」(S.51)。「愛の意志」は、他者に向かう意志であり、「基底の意志」は、自己の基底に向かう意志である。他者と自己に関して、この二つは、対立するように見える。しかし、自己から見て自己自身は、最初の他者ではないだろうか。そうであるならば、愛は、自己を愛することから他者を愛することへと拡大するのではないだろうか。また、同様に「基底の意志」も、自己の基底から他者の基底へと射程を広げるのではないだろうか。「ひとつになる」とは、「基底の意志」、つまり自己愛が、「愛の意志」、つまり純粹愛へと高まることである。

(5) これについては、マルティン・ハイデガー (1889-1976) の次の講義録を参考にした。Vgl. *Identität und Differenz*, Verlag Günther Neske, 1957. なお、この講義録の理解にあたっては、次の翻訳を参考にした。大江精志郎訳『同一性と差異性』、理

想社、一九六〇年。ハイデガーによれば、存在の同一性とは、論理的なものではなくて、主体、すなわち、人間や存在によってなされるもの、創造されるものなのである。

- (6) グリメは、「可能態 (puissance)」、つまり、可能なのは、「完全なある存在の指数」であると言う。Cf. Elisabeth Grimmer, «De l'effectivité ou la présence absente des Schelling chez Jankélévitch» in *Archives de Philosophie* t.73, 2010, p.273. また、グリメも指摘するように、ジャンケレヴィッチによれば、生成中のただそれだけの同一的な存在は、その生成の支えであるが、その生成は、非連続の連続の段階を持っている (cf. OD, 83)。

- (7) この「前もって形作られる (préformé)」については、注意が必要である。というのも、前もって完成しているという意味ではないからである。ジャンケレヴィッチは、これをどのように考えたのか。

ベアトによれば、ジャンケレヴィッチは、「ベルクソンが言うような『可能的なもの (possible) — 事実的なのもの (réel)』と『潜在的なもの (virtuel) — 現実的なのもの (actuel)』の二つの類似的な構造に着目している」。Cf. José Manuel Beato, «Paradoxes of virtue in Vladimir Jankélévitch's Moral Philosophy» in *Contemporary perspectives on Vladimir Jankélévitch — On What Cannot Be Touched*, Lexington Books, 2019, pp.29-30. ベルクソンは、『思想と動くもの』(一九三四)の「可能的なもの」と事実的なのもの」(一九三〇)で、「可能的なもの」は、「過去における現在の映し (mirage)」である」と述べる (Cf. Henri Bergson, *La pensée et le mouvant — Essais et Conférences* — puř. 1999, p.111)。逆に、「事実的なのもの」言い換えれば、現在は、過去の「事後的な表象」(杉山直樹、「私たちをかたちづくる力」、森口美都男訳『道徳と宗教の二つの源泉』、中央公論新社、二〇〇三、一四頁)を行う。このことは、われわれが現在を生きていることが、「可能的なもの—事実的なのもの」を「潜在的なもの—現実的なのもの」に変化させると示唆しているのではないか。なるほど、「可能的なもの」と事実的なのもの」では、「潜在的なもの—現実的なのもの」の用語を用いていないが、ベルクソンが、「可能的なもの」が時系列的に「事実的なのものになる」ことだけではなく、「事実的なのものが自らを可能的なものにする」ことも述べている以上、これは明らかである。というのも、彼は、時系列的に「可能的なのものが事実的のものになる」だけの「可能的なもの」と事実的なのもの関係についての思弁」を避けることをわれわれに勧めるからである (cf. *La pensée et le mouvant*, pp.115-116)。

そもそもベルクソンは、『物質と記憶』(一九六六)で次のように述べていた。「潜在的なイマジージュが自分を実現する過程は、このイマジージュが身体から有益な歩みを得るに至る一連の諸段階以外のものではない。感覚的なのものと言われている中核が興奮することは、こうした段階の最後である。それは、運動的反応への序曲、つまり、空間のなかでの行為の始まり



である。別な言い方をすれば、潜在的なイマージュは、潜在的な感覚へと進展し、そして潜在的な感覚は、現実的な(ved)運動へと進展する」(Henri Bergson, *Matière et mémoire*, puf. 2004, p.146)。これについてドゥルーズは、『ベルクソンニスム』(一九六六)で次のように言う。「自分を現実化するために、潜在的なものが、取り消しあるいは限定によって事にかかるとはあり得ない。そうするためには、潜在的なものが、現実化のためのそれ自身の線を現実的な行為のなかで創造するに違いない」(Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, puf. 2014, p.100)。実際、ベルクソンも『物質と記憶』において「何かを」思い浮かべることは「何かを」回想することではない」(『*Matière et mémoire*, p.153)と述べている。回想することは、過去の出来事を時系列的に整理することではない。身体を基点として現在から過去へ向かうことなのである。要するに、一方で、持続を時間として解釈する場合、意識の構造は、「可能的なもの・事実的なもの」であり、他方で、持続を現在の行為として解釈する場合、意識の構造は、「潜在的なもの・現実的なもの」である。ドゥルーズは、西洋哲学史において、例えば、ライプニッツは、「潜在的なもの」と「可能的なもの」との類似性を躊躇しながら論じたと指摘する (cf. *Le bergsonisme*, p.100)。しかし、これはベルクソンから見れば、不十分である。

では、ジャンケレヴィッチは、ベルクソンの議論から何を学んだのか。それは、行為における論理的な必然性の拒否である。例えば、ひとに親切にするのは、以前からひとに親切にすることができたからであるという主張は、目の前の知らないひとに親切にできるかという問いに答えられない。なぜなら、もし目の前の見知らぬひとに親切にすることができない場合、それは、以前からひとに親切にすることはできるといふ主張が誤りだからである。要するに、ジャンケレヴィッチは、ひとが過去が背負いながらも、広く言えば現在において、狭く言えば今の瞬間において過去から自由であり、そこに自由な行為が成立すると考えている。これは、ベルクソンの哲学において、ドゥルーズが言うように、「潜在的なもの」と「現実的なもの」の違いが「創造」にあるのと矛盾しないのではないか。ジャンケレヴィッチにとって、「行為」は、「行為のできる」と「行為するに違いない」の二つの様相に分かれている限りは、完全な行為ではない。行為は、それが「行為すべきである」の瞬間、完全な行為なのである (cf. Grimmer, *op. cit.*, p.272)。

ただし、この行為は、未来に向かっている行為というよりも、むしろ、過去に対する現在の行為である。例えば、誰かを助けようとする時、その誰かは既に存在するからである。これは、行為に限らず、思惟においても同様である。なぜなら、われわれが何かを考えている時、それは、映画館でひとつのフィルムを見るようなものだからである。フィルムは、われわれに時間的に先立っている。

- (8) これは、おのおのの瞬間が最初になるということである。『第一哲学—《ほとんど》の哲学への導入—』（一九五三）でジャンケレヴィッチは、それは、瞬間が、「覆いを取られた現れから「自己」啓示的な出現へ」と「変化」しているからである、と論じている。「裸の実体」がないように「裸」瞬間はない。要するに、単に生成消滅するだけの純粋な瞬間はない。 Cf. Vladimir Jankélévitch, *Philosophie première—Introduction à une philosophie du «Presque»*— pp.27-28.
- (9) これと類似した議論の展開の仕方が、『道徳の逆説』（一九八一）にある。ジャンケレヴィッチは、「ひとは道徳なしには生きることとはできない」「つまり、道徳なしには、自分のために生きること、他人のために生きることとも不可能である、と論じている。 Cf. Vladimir Jankélévitch, *Le paradox de la morale*, Seuil, 1981, p.34.
- (10) これについては、次の研究書から示唆を得た。 Cf. Anthony C. Thiselton, *Why hermeneutics?—an appeal culminating with Ricoeur*, Cascade Books, 2019. 本書でシセルトンは、聖書の章句のアレゴリーからメタファーへ、次にメタファーからシンボルへの移行を論じている。つまり、それは、単なる「伝達の」メッセージから「コミュニケーション的」メッセージへ、次に「コミュニケーション的」メッセージから「コスモス」と結合するメッセージへの移行である。しかし、なぜメタファーからシンボルへ移行しなくてはならないのか。それは、読者の時間的な慣れによってたとえ話が単なる教訓話に変化してしまうからである。聖書物語は、神の「認識」とそれと同時の生き方の「転覆」である（J・L・スカ著、佐久間勤・石原良明訳『聖書の物語論的読み方—新たな解釈へのアプローチ』、日本キリスト教団出版局、二〇一三年、参照）。それゆえ、メタファーは、神のシンボルでなくてはならない。他者論で言えば、それは、他者のシンボルということになるのだろうか。
- (11) ジャンケレヴィッチは、先ほどの『第一哲学』の第六章第七節「アレゴリーの絶対・他」で同様のことを述べている。彼によれば、われわれは、自己自身を含め何かを語る場合、それ自体を語らなければならない。それ自体を語るとは、もはや言葉による語りではなくて、それについて行為すること、それを生きることではないだろうか。というのも、それ自体を語ることは、それ自体になることだからである。 Cf. *Philosophie première*, pp.120-124.
- (12) Cf. Isabelle de Montmolin, *La philosophie de Vladimir Jankélévitch—Sources, sens, enjeux—*, 2000, puf, p.59. なお、イザベルは、「これを「狭小化（*vénétrissement*）」と定義する。